

『村落エコツーリズムをつくる人びとーバリの観光開発と生活をめぐる民族誌』

(岩原紘伊著・風響社・2020年) 講評

本書は、スハルト政権期に大規模な観光開発がすすめられ、インドネシア随一の観光地となったバリ島を調査地とし、グローバルに流通するコミュニティ・ベースド・ツーリズム(CBT)がローカル社会の文脈に合わせて適応されていく動態を、NGOやその協力者といったアクターの動向に焦点をあてながら記述した民族誌である(p.1)。本書のねらいは、「受動的なものとして捉えられてきたCBTの導入をめぐるホスト社会の人びとの対応を、自らを取り巻く問題を解決するためのダイナミックで能動的な実践として描き出す」(p.35)ところにある。そこで本書では、CBTが導入される現場を「相互作用の空間」と捉え、その場に注目し、そこにどのような組織や個人がかかわり、どのような動機からCBTの名のもとにおいて観光が新たに生み出されるのか、そこで誰によってどのような意味がCBTに付与されるのか、「翻訳」がなされているのか、そこでどのような認識枠組みが形成され、人びとがどのような行動をするのかに迫っていく。本書では、生活者たちの観光に対する認識枠組みにも目配りをしている。こうした視座にたち、CBT導入に携わるローカルな仲介者の実践、CBT導入を経験した村の側の仲介者の実践、導入後の村でのエコツーリズムの実践、NGOアクティビストたちのバリ社会全体を対象にした環境運動の現場の様相を丁寧に描き出す本書は、CBTの適用が、住民が運営の主体となる観光モデルの開発に留まらず、社会運動の側面を合わせて持っていること、CBTをめぐる実践は一様ではないことを明らかにする。また、CBT導入の現場を徹底的に観察したことで、これまで十分に議論されてこなかった、地域社会における「観光の生産」(p.276)のプロセスも描き出している。

本書は、CBTに関する知識をローカルな現場へと接続する仲介者の営みに着目することで、従来硬直化したものとして描かれることが少なくなかったCBTの現場を動的に捉え直した点、そこからCBTをめぐる実践が社会運動の側面を合わせもっている点を浮き彫りにした点に大きな功績があるといえる。また、さらなる議論の余地はあるものの、「観光の生産」の議論にふみこんだ点も興味深い。

本書は、観光研究に新たなる知見と視座を提示する労作であり、著作奨励賞の授与にふさわしい作品である。

## 目次

序論 問題の所在と理論的背景

第1部 ポスト・スハルト期インドネシアにおける開発と観光（開発、環境運動、NGO；バリにおける観光開発と社会）

第2部 コミュニティのための観光開発（村落エコツーリズム：NGOによる観光開発；村落エコツーリズムの村：I村の事例から；村落改革運動としての村落エコツーリズム：A村の事例から）

第3部 観光開発と社会運動（NGOアクティビストたちの活動の作法：World Silent Dayキャンペーンを事例として；村落観光開発をめぐる試行錯誤）

結論 まとめと展望